TEAM TOYOTA ～トヨタの礎を築いた10人～

1 細谷 四方洋 キャプテン
Shihomi Hosoya

2 田村 三夫
Mitsuo Tamura

3 福澤 幸雄
Sachio Fukuzawa

4 津々見 友彦
Tomohiko Tsutsumi

5 鮒子田 寛
Hiroshi Fushida

6 大坪 善男
Yoshio Otsubo

7 見崎 清志
Kiyoshi Misaki

8 蟹江 光正
Mitsumasa Kanie

9 久木留 博之
Hiroyuki Kukidome

10 川合 稔
Minoru Kawai

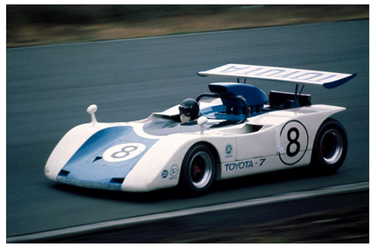
※TEAM TOYOTA加入順

1966年チーム・トヨタは、翌年に販売を控えた「トヨタ2000GT」を2台、「第3回日本グランプリ」にエントリーさせた。2台の「トヨタ2000GTレーシング」のうち1台はリタイヤしたものの、細谷四方洋（キャプテン）がドライブしたトヨタ2000GTが見事第3位に入賞する。

次なる目標に定めたのは、“国際スピード記録”の樹立だ。この時、チーム・トヨタのドライバーは、細谷四方洋、田村三夫、福澤幸雄、津々見友彦、鮒子田寛の5人。台風28号の影響による豪雨と強風の悪条件のなか、トヨタ2000GTは78時間（1人2時間30分交替）もの連続走行をしてみせる。平均速度206.18kmで16,000kmを走り切り、結果として3つの世界記録（72時間、15,000km、1万マイル）と13の国際新記録を樹立してみせた。

1967年も半ばを過ぎたころ、トヨタはフロントエンジンの市販車をベースにしたレーシング・カー「トヨタ2000GT」でのレース活動にピリオドを打ち、本格的レーシング・カーの開発に専念しはじめる。それは翌1968年、「トヨタ7」として結実。トヨタはこの新型車に日本グランプリ制覇の夢を託すことになる。

1969年、トヨタはそれまで開発を続けていたFIA世界選手権用車両、すなわち対“Le Mans”用車両から、当時爆発的人気を博していた“Can-Amシリーズ”用車両へ開発の路線変更を決断。そして生まれたのが、オールカーボングラスファイバーボディ、アルミシャーシー、チタニウムなど徹底した軽量化を追求したボディに（乾燥重量720kg）5000cc DOHC V8エンジンを搭載した「TOYOTA NEW 7 ターボ」であった。



TEAM TOYOTA の主な戦績

	1965年	1966年	1967年	1968年	1969年
1月		鈴鹿500kmレース トヨタスポーツ800 【優勝】細谷 四方洋			
2月					
3月	第4回ナショナルストックカーレース クラウン 【優勝】田村 三夫	第4回全日本クラブマン（富士スピードウェイオープニングレース） トヨタRTX（トヨタ1600GTプロトタイプ） 【優勝】細谷 四方洋	富士24時間レース トヨタ2000GT 【優勝】細谷 四方洋／大坪 善男		鈴鹿500kmレース トヨタ7 【優勝】川合 稔
4月					
5月		第3回日本グランプリ トヨタ2000GT（トヨタ2000GT デビュー戦） 【3位】細谷 四方洋		日本グランプリ（富士） トヨタ7 【優勝（GPⅢクラス）】大坪 善男	
6月		鈴鹿1000kmレース トヨタ2000GT 【優勝】福澤 幸雄／津々見 友彦	富士1000kmレース トヨタ2000GT 【優勝】細谷 四方洋／大坪 善男		
7月			鈴鹿12時間レース トヨタ1600GT 【優勝】福澤 幸雄／鮒子田 寛	富士1000kmレース トヨタ7 【優勝】鮒子田 寛／蟹江 光正	富士1000kmレース トヨタ7 【優勝】鮒子田 寛／大坪 善男
8月				鈴鹿12時間レース トヨタ7 【優勝】細谷 四方洋／大坪 善男	
9月				鈴鹿1000kmレース トヨタ7 【優勝】福澤 幸雄／鮒子田 寛	
10月	オール関西チャンピオン コロナ1600S 【優勝】細谷 四方洋	スピードトライアル トヨタ2000GT 【世界記録3個、国際記録13個樹立】 細谷 四方洋／田村 三夫／福澤 幸雄／津々見 友彦／鮒子田 寛			日本グランプリ トヨタ7 【3位】川合 稔
11月	鈴鹿300kmレース トヨタスポーツ800 【優勝】細谷 四方洋				第2回ワールドチャレンジカップ 富士200マイルレース（日本CanAm） トヨタ7 【優勝】川合 稔
12月					

GAZOO Racing

©TOYOTA MOTOR CORPORATION, All Rights Reserved.